

福本 義憲

オットー・ゾイカの初期幻想小説における Macht の諸相

福本 義憲

1. 「アウトサイダー」オットー・ゾイカ

オットー・ゾイカという名前に出会ったのはいつだったのか、明確には思い出せないのだが、2003年3月発行のROM誌117号¹に寄稿したエッセイにはゾイカについて次のように記している。

「ウィーン生まれのオットー・ゾイカ(1881~1955)も、実験的なミステリー小説にとりくんだ一人である。ゾイカは幻想文学作家として知られるが、1911年に発表した『権力の息子たち』は「未来探偵小説」と銘打たれていた。マインド・コントロールが主題だが、ふたりの探偵とマフィアの首領との知恵比べが描かれる。『フィリップ・ゾンロウ事件簿』(1926年)はホームズのパロディだが、英米風の探偵の合理・主知主義に対する当てこすりが時代の雰囲気をよく伝えている。」(福本 2003, 77)

この一節を書いた頃は、クラカウアーのDer Detektiv-Roman (Kracauer 1979: 邦訳『探偵小説の哲学』)の翻訳と格闘していた。その前書きにクラカウアーは、「ポオの作品は、探偵という人物像を明確に形象化したし、知的な戦慄に至当な表現を与えたのだった」と記し、ヨーロッパの(初期の)探偵小説作家八名の名前をあげているのだが、そのなかに「アウトサイダーのオットー・ゾイカ」(der Outsider Otto Soyka)が入っている²。クラカウアーはDer Detektiv-Romanの原稿を1925年2月15日に書き上げている(Kracauer 1979, 135)。二〇年代半ばのドイツ語圏においては、オットー・ゾイカは(少なくとも幻想・犯罪・歴史小説の世界では)有名な作家の一人だったと言っていいだろう³。そして、クラカウアーの言葉によれば「ポオ

¹ Revisit Old Mysteries, no.117 in ser.X 2003/3/30. 75-78.

² 他の七人は、ドイル、ガポリオ、エルヴェスタ、ルブラン、ローゼンハイン、ヘラー、ルルーである。ドイツ語圏の作家はローゼンハインとゾイカの二人である。

³ 1925年の時点でゾイカの著書は小説・戯曲を合わせて少なくとも十二冊を数えた。そのうち、1910年から1913年までに五冊、大戦後の1919年から1925年までに七冊が出版されている。Bloch (1999)参照。Leo Perutzの伝記作者SiebauerはPerutzとの関連で次のように書いている。„Soyka war in den zwanziger Jahren ein

オットー・ゾイカの初期幻想小説における Macht の諸相

の指し示した方向」においてゾイカは「アウトサイダー」だった。だが、ゾイカはクラカウアーのいう意味、つまり、彼の作品がどのジャンルに属するのを見極めがたいという意味だけではなく、当時の文学世界の存在様式(「文学」的機能のあり方)という意味においても「アウトサイダー」だったと思われる⁴。

ゾイカは、クラカウアーの証言からも読み取れるように、二〇年代においてはその「アウトサイダー性」ゆえに(あるいは、にもかかわらず)、よく名の知られた作家だったのだが、第二次大戦後以降、そして今でもなお、その名を知る人は(ゲルマニスティクにおいてさえも)ほとんどいない。ゾイカがその独自性を発揮した「幻想小説」のジャンルに属するグスタフ・マイリンク(1862～1932)、ハンス・ハイント・エーヴァース(1971～1943)、カール・ハンス・シュトロール(1877～1946)、アルフレート・クビーン(1877～1959)、レオ・ペルッツ(1882～1957)たちにしても、マイリンクやエーヴァースのような「幻想文学の巨匠」は別格として、戦後において再評価、あるいはルネサンスを経てきている⁵。だが、ゾイカの名が紹介されるまでには、戦後四〇年を待たなければならなかった。ゾイカは1984年に出版されたHans Heinz Hahnlの『忘れられた文学者たち(Vergessene Literaten)』にとりあげられた作家の一人だった。Hahnlは四頁ほどの紹介文の冒頭に「オットー・ゾイカは両大戦間の作家としてもっとも忘れられた世代に属している。これらの作家は一般的に知られているには私たちから遠く離れすぎているし、また、文学研究の対象として関心を惹くには私たちに近すぎる」(Hahnl 1984, 139)と記している⁶。

bekannter Autor, der Kriminalromane und, ebenso wie Perutz, historische Romane verfaßte und sich daher manchmal in Konkurrenz zu ihm sah.“ (Siebauer 2000, 129f.)

⁴ Urbach(1999, 6)は、ゾイカが時代の哲学的・思想的・心理学(精神分析)的なテーマを「大衆小説(Unterhaltungsliteratur)」の形式を用いて「純文学的に」(seriös)に小説化したと指摘している。その意味で、ゾイカの作品は「文学」を越えるIntertextualität/ Interdiskursの問題を考察する上で重要である。本稿の視点のひとつはここにある。

⁵ 我が国においても、七〇年代から八〇年代にかけて、前川道介、種村季弘らによる精力的な紹介があったし(最近では『独逸怪奇小説集成』など)、マイリンク、エーヴァース、クビーンの長編小説も早い時期に翻訳されている。八〇年代のドイツ語圏でのペルッツの再発見によって邦訳(『最後の審判の巨匠』)も現れた。

⁶ Hahnlの記述はKarl KrausおよびDie Fackelをめぐる逸話に終始している。これはゾイカが1953年10月のDie Schau誌(19/20号)に発表したBegegnung mit Karl Krausに基づくと思われる。Hahnlのゾイカの作品についての論評は、「彼は探偵小説(Kriminalromanen)で成功を収めた」と書いている以外には僅かしかないが、

福本 義憲

だが、1910年から1925年に発表されたゾイカの諸作品は、少なくとも学問的な研究の対象としてはけっして近すぎることはないはずだ。実際に、Hahnlの著書の翌年1985年には、Urbachがゾイカの初期作品⁷を「Macht」に焦点を絞って分析した画期的な論文を発表している。しかしながら、1990年のClemens Ruthnerの „Je veux revenir” まで、ゾイカを本格的にとりあげた研究は現れなかった。Ruthnerは1995年に『夢の鞭(Traumpeitsche)』(1921年)がSuhrkamp社のPhantastische Bibliothekのシリーズに収められた際に詳細な後書きを書くことになるのだが(Ruthner 1995, 195ff.)、ゾイカの没名性はRuthnerが1990年の上記論文(Diplomarbeit)に「オットー・ゾイカの文学的作品の分析とともに、エーヴァース、シュトロープル、シュプンダ以上にドイツ文学研究(ゲルマニスティク)の未開拓地(Neuland)に足を踏み入れることになる」(下線は論者)と書き記していることから分かる(Ruthner 1990, 134)。この関連で興味深いのは、Ruthnerがオーストリア文学史上でのゾイカの黙殺に「宿敵(Erbfeind)」⁸レオ・ペルッツの文学的ルネサンスの影響を見ていることである⁹。

七歳年上のKarl Krausに見出されて¹⁰、1904年に„Die Fackel”“主宰者を中心とするTafelrunde am Kraus-Tisch(Soyka 1953)に加わったゾイカは、1909年までのほぼ五年間、断続的に社会・道徳・教育問題についての社会批判的エッセイ、そして

Traumpeitscheについての短い適切なコメント、およびDer entfesselte Mensch(1919)について表現主義との関連に言及する興味深い指摘がある(Hahnl 1984, 142)。

⁷ とりあげられているのはHerr im Spiel(1910)からÜberwinder(1926)までの八作品である。Der entfesselte Mensch(1919)およびIm Joch der Zeit(1919)は含まれない。Urbach(1995)とUrbach(1999)は冒頭を除いて記述が重なっている部分がある。本稿はUrbachの両論文に多くを負っている。

⁸ ゾイカとペルッツの確執および1925年10月18日の„Prügelszene im Café Herrenhof”については、注3にあげたSiebauer(2000, 130)、Garstenauer(2001, Anhang 9)、Ruthner(1995, 198)、Ruthner(2004, 224)などを参照。

⁹ Garstenauer(2001, 12)によれば、Ruthnerは二人の確執がオーストリア文学史記述に与えた影響をテーマ化した論文を書いている。

¹⁰ 仲介したのは義理(異父)兄弟のSiebert Ehrensteinだった。夫(Ottoの父)を亡くした母は1895年に医師Jakob Ehrensteinと再婚した。この義理の父の兄弟の子供に後の表現主義詩人Albert Ehrenstein(1886-1950)がいた。Soyka(1953), Hahnl(1984, 140), Urbach(1999, 3f.)参照。二〇世紀初頭の「ウィーン・カフェハウス文学」の諸流派についてはRuthner(2004, 218ff.)参照。

オットー・ゾイカの初期幻想小説における Macht の諸相

書評や短編などを寄稿しているが、その数は合わせても十五編であり¹¹、けっして定期的寄稿者とはいえなかった¹²。この間にゾイカは „Die Fackel“の以外の文化・文学批評誌 „Simplicissimus“、Herwarth Walden主宰の „Sturm“にも原稿を寄稿しながら、1906年には最初の文化批判的著書 *Jenseits der Sittlichkeits=Grenze* を出版し、さらに最初の「未来探偵小説(Zukunfts-Detektivroman)」*Die Söhne der Macht*を書き上げている。

本稿では、ゾイカの「ジャンルの区分が容易ではない(ゆえに文学史研究からこぼれ落ちてしまった)」¹³作品のうち、第一次大戦前に書かれた二つの幻想小説『権力の息子たち (*Die Söhne der Macht*)』(1911年)、『賭博の支配者 (*Herr im Spiel*)』および社会批判的評論『道德境界の彼岸 (*Jenseits der Sittlichkeits=Grenze*)』(1906年)をとりあげて、二〇世紀初頭における「技術／者 (*Technik/ Techniker/ Ingenieur*)」「新しい人間 (*Der neue Mensch*)」「精神療法 (*Psychiatrie*)」「催眠 (*Hypnose*)」「暗示 (*Suggestion*)」「操作 (*Manipulation*)」といった(インター)ディスキュルスを視野におきながら、ゾイカの初期作品に現れる「力 (*Macht*)」の諸相を読み解いていきたいと思う。

2. *Jenseits der Sittlichkeits=Grenze*

「世界観(*Anschauung*)や法律を意見(*Meinungen*)の闘いの場から遠ざけた力 (*Macht*)は、»神聖な« (*heilig*) という概念に伴われて、文化史のどのページにも見出されると、当時二五歳だったゾイカは 1906年に刊行した『道德境界の彼岸 (*Jenseits der Sittlichkeits=Grenze. Ein Beitrag zur Kritik der Moral*)』の冒頭の部分 (*Gesetz und Kritik*)に書いている。この場合の力 (*Macht*)とは、従来の歴史において「自由な批判」を妨害してきた「阻害的な力 (*die hemmende Macht*)」である。この力は、»神聖性« (*Heiligkeit*) という言葉によって、人間の思考が生み出したもの、つまり表象 (*Vorstellungen*) を、人間の精神による批判から隔離してきたと述べる。ここでゾイカが批判の対象としているのは、力 (*Macht*)¹⁴それ自

¹¹ Ruthner (1990, 134)による。

¹² クラウスは次第に一人で原稿を執筆するようになっていった(Urbach 1999, 4)。

¹³ Urbach (1985, 252): „Was Wunder, wenn er [Soyka] Ansprüche wegen, die er an seine Leser stellte, in Vergessenheit geriet und daß er bisher durch die Raster der Literaturgeschichte und –wissenschaft fiel, weil sein Genre nicht leicht einzuordnen war.“ (下線は論者)

¹⁴ これから見るように、*Macht*という言葉はゾイカの作品の中心的なモチーフであ

体というよりも、「神聖性」(Heiligkeit) という概念であることに注意すべきであろう。むしろ、この「神聖性」という概念がMachtを獲得し、Machtを濫用すると言い換えることができる。その作用は、「伝染病」(ansteckende Krankheit) と比較しうる猛威を発揮する。

Wer den Begriff des Heiligen in seiner Wirkung in der Kulturgeschichte verfolgt, dem wird sich von selber der Vergleich mit einer im hohen Grade ansteckende Krankheitserscheinung aufdrängen. In den Religionskriegen aller Zeiten hat diese Seuche mehr Opfer gefordert als je irgend eine andere. Unter dem Einfluß des Heiligen wurde das Handeln des Menschen anders als der Vernunft gemäß, und das allein [, sic!] rechtfertigt vom modernen Standpunkt die Bezeichnung Krankheit. (Soyka 1906, 6f.)

「神聖なるもの」の影響を蒙った人間の行為は理性を逸脱していく。それは「病的」という名に相応しいとゾイカは述べる。そして、その症状はブロイアー／フロイトによって分析された「ヒステリー症状」と酷似している。ここでゾイカは、1895年に発表されたブロイアー／フロイトの『ヒステリー研究』(Studien über Hysterie) に依拠しながら、「神聖なるもの」に取り付かれた人間が病的な症状を呈することを出発点として、「驚くべき結果」(überraschendes Resultat) へと導びいていく。

Es führt zu der Erkenntnis, daß dieselbe Krankheit, die in einer ihrer Formen die Welt regiert, in einer andern längst als solche erkannt und der ärztlichen Überwachung zugewiesen ist. Dieselbe Nervenkrankheit, die in der Geschichte den Verzicht auf Erkenntnis, die blinde Verehrung schuf, ist in einer ihrer Formen längst der Behandlung des Arztes zugewiesen; sie führt in der Anstalt den Namen Hysterie. (Soyka 1906, 7)

ゾイカはこのふたつの現象(「神聖性」と「ヒステリー」)の同一性を、ブロイアー／フロイトのヒステリー理論の記述に基づいて証明しようとする。この時「ヒステリー理論」としてゾイカが依拠するのは、『ヒステリー研究』のうちでも主に第三章のブロイアーの理論的考察(Theoretisches)であることは注意すべきであろう。ブロイアーのヒステリー理論は、機械論的な生理学的考察の性格が濃厚であり、ゾイ

るが、多義的でもある。「力」あるいは「権力」と訳すが、ゾイカにおいてdie Macht der Persönlichkeitという言葉がしばしば用いられるように、人間存在に内在する力(Macht)を表すものでもある。

オットー・ゾイカの初期幻想小説における Macht の諸相

カにおける技術性重視の思考と共鳴する要素があると思われる¹⁵。ゾイカにとってブロイアー／フロイトのヒステリー理論と「神聖性」＝「ヒステリー」理論を結ぶ働きをしているのは、ゾイカが引用するブロイアーの以下の考察であろう。

Als psychisches Trauma wirkt hier ein Affekt des psychischen Schmerzes, wenn der Assoziationsablauf dadurch gehemmt wird, daß gleichwertige Vorstellungen unvereinbar mit einander und (sic!) [sind:] wenn z.B. neue Gedanken mit festgewurzelten Vorstellungskomplexen in Konflikt geraten. Solcher Natur ist die Pein des religiösen Zweifels, der so viele Menschen unterliegen und noch viel mehr unterlagen. [...] ¹⁶

異なる表象が内部に内部に根付いた表象複合体と葛藤に陥る場合の心的苦痛として、ここでは宗教的葛藤が例にあげられている。これに続くブロイアー／フロイトの「教育によって身についた確固たる道徳的表象複合体」についての一節は、道徳の神聖化を批判するゾイカの思考回路とより合致しているであろう¹⁷。だが、ゾイカはそれには触れずに、こうした心的トラウマは内的な異物となって存在し続けるが、意識されることなく、むしろ意識内容から隔離され、無意識下に抑圧され、ヒステリー一症状を生み出すと考える「ヒステリー理論」と歴史上の「神聖性」の諸症状とを重ね合わせるのである。

Daß eine Verwandtschaft zwischen Heiligkeit und Hysterie vorhanden ist, zeigt das häufige Zusammentreffen hysterischer Störung und des

¹⁵ ゾイカがこの個所でブロイアー／フロイトの「ヒステリー理論」の成果を称賛する一方で、ハヴロック・エリスの次の批評をわざわざ引用しているのは、このことと関連しているのであろう。“Das wirkliche Verdienst der Breuer und Freud’schen Forschungen ist, daß – während sie vielleicht eine Rechtfertigung des ungenügend verstandenen Begriffes liefern wollten, der seit der Erfindung der Bezeichnung Hysterie in den Köpfen der Beobachter spukte – sie sicherlich eine bestimmte physiologische Erklärung einer psychischen Erkrankung gegeben haben.“ (Soyka 1906, 8)

¹⁶ 参照したのはFischer版のモノグラフBreuer/Freud (2007)である。ただしこの箇所は原文では „Als psychisches Trauma wirkt hier ein Affekt des psychischen Schmerzes,“ではなく „Wohl aber geschieht das“(ebd., 228)となっている。これはおそらく文脈の都合上ゾイカが書き直したのであろう。

¹⁷ „Dies ist aber immer der Fall, wenn der Konflikt besteht zwischen dem festen, anezogenen Komplexe der moralischen Vorstellungen und der Erinnerung an eigene Handlungen oder auch nur Gedanken, welche damit vereinbar sind: die Gewissensqual.“ (Breuer/Freud 2007, 228)

Heiligenkultes bei ein- und derselben Person. Die Chroniken der Klöster, die Heiligen- und Wunderlegenden aller Religionen predigen es: nicht minder auch die von Ärzten durchgeführten psychischen Analysen an Hysterischen. In den oben angeführten Beispiel ist der Glaube an die Heiligkeit der gesellschaftlichen Moral eine Voraussetzung der Erkrankung. (Soyka 1906, 11)

ヒステリー患者がその発病 (Erkrankung) と関連する想念領域を隔離し防御するように、社会は自らの存続の根底を脅かすものを「神聖化」してきた。ゾイカによれば、このような「意識に参入できない (bewußtseinsunfähige) 表象」¹⁸は「死 (Tod)」であり、「自己の無意味性 (eigene Nichtigkeit)」であり、「現世での不公平 (Ungerechtigkeit/Unrecht auf Erden)」である。この三つのモチーフが宗教の神聖性の源泉であり、識閥から抑圧され、隔離され、神聖化されるのである (Soyka 1906, 12ff.)。そして、社会の「法律」(Gesetze und Rechte)もまた神聖化される。

Auch die Heiligung sozialer Gesetze und Rechte verrät mehr als das bloße Bestreben der Machthaber, sich die Macht zu sichern. Nichts, das der Kritik zu stehen vermochte, ist je vor ihr zum Heiligtum geflohen und eine tausendjährige Erfahrung lehrt, daß die Flucht vor der Kritik stets in der gerechtfertigten Furcht vor der Kritik ihre Ursache hat. [...] Das Maß der Heiligkeit, die einer Satzung zugesprochen ist, gibt auch das Maß ihrer Abwehr gegen die Kritik und damit das Maß ihrer Mängel und Schwächen. In der Ungerechtigkeit, die sie enthalten, ist die Ursache der Heiligung von Gesetzen und Rechten zu suchen. (Soyka 1906, 15)

社会が「強者の力」(Macht des Stärkeren)を濫用して個人に対して重大な不正 (Unrecht) を働くとき (たとえば、死刑の判決を下すとき)、その判決を「神聖化」することによって、社会はわだかまる不正感を意識下へと抑圧し、自己を防御 (Abwehr) するのである。

ゾイカの「神聖性崇拜=ヒステリー理論」を徹底的に考えていけば、ヒステリー症患者を「病人」として治療しようとするプロイアー/フロイトのヒステリー概念はもはや維持できなくなる。「神聖性」に囚われて理性を失った「神聖ヒステリー症」

¹⁸ Breuer/Freud (2007, 243): Solche Vorstellungen, welche (aktuell aber) unbewußt sind, nicht wegen relativ schwacher Lebhaftigkeit, sondern trotz großer Intensität, mögen wir *bewußtseinsunfähige* Vorstellungen nennen. 「意識に参入できない」の訳語は邦訳(金森訳:『ヒステリー研究・下』74頁)による。

オットー・ゾイカの初期幻想小説における Macht の諸相

人間の残虐行為 (の「犯罪性」) は、プロイアー／フロイトの「ヒステリー症患者」によって区画された「病人」の境界をおおきく踏み越えているからだ。このとき、「病気」あるいは「病的なもの」、「犯罪」あるいは「犯罪者」の境界は疑わしいものとなる。この境界の曖昧さは、とりわけ「道德律」(Sittengesetz) とその「犯罪者」(もしくは「病人」) の歴史において明らかになる。

Das Gesetz der Sitte war der Heiligtümer heiligstes. Hier war der Organismus der Gesellschaft am empfindlichsten, hier war Kritik Verbrechen und Verbrechen gleichbedeutend mit schwerster Achtung.

Hier die heilige und unüberschreitbare Grenze, die schon von ferne jedem Gegner halt gebot, hier brach der Trotz der kühnsten und besten Revolutionäre. Bitterster Haß, tiefste Verachtung ward jedes anders Denkenden Teil. (Soyka 1906, 17)

道德律とはこの場合、性愛 (Sexualität) の良俗に関わる「法」であり、それに反する者 (いわゆる「倒錯者」) は、社会的な法律を侵犯した場合以上に重い「犯罪者」の烙印を押され、厳しく弾圧された。だが、今やその血腥い歴史の終幕にあたって「驚くような落ち (überraschendes Pointe)」が用意されていたとゾイカは言う。

Als man gezwungen schien, den begangenen Irrtum zu bekennen, als der Begriff des Verbrechens gegen die Sitte zu kraß von den Anschauungen und Erkenntnissen der Zeit abstach, da setzte man an Stelle des Begriffes Verbrechen jenen der Krankheit. Statt gegen sittliche Verbrecher zu wüten, galt es nun plötzlich, Kranke zu schützen. (Soyka 1906, 19)

ゾイカは道德律についての論述において、何箇所かフロイトの『性理論三篇』(Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie 190)を参照している¹⁹。フロイトからの影響の大きさはゾイカの記述全般や個々の好意的なコメントからもうかがえる²⁰。ゾイカが

¹⁹ Soyka 1906: 23, 39, 43, 50. 84. 23 頁には性欲動についての一般に流布している誤謬を指摘したフロイトの文が引用されている。Freud (2000, 47)。ゾイカは Die Fackelの191号(1905)でフロイトのDrei Abhandlungen zum Sexuallebenを称賛を込めて書評している(Ruthner 2004, 223)。

²⁰ Soyka (1906, 39): „Was das Freudsche Buch betrifft, so steht es in seinen Auffassungen so hoch über allem, das bisher in der Fachliteratur geboten wurde, daß es schwerlich mit dieser gleichzeitig beurteilt werden kann. Seine Bedeutung liegt unter anderem darin, zu zeigen, wie viel vorurteilsfreie Wissenschaft und genialer Scharfblick bei der vernunftmäßigen Interpretation von Begriffen zu leisten vermögen, bei deren Aufstellung keine Vernunft am

福本 義憲

攻撃の対象とするのはブロイアー／フロイトの性理論ではなく、フォン・クラフト・エービング²¹、オーギュスト・フォレル²²の精神医療家の性理論である。これらの精神医学の実践家を一方の極として、ゾイカは性倒錯の分野には二つの一見敵対するかのような見解が存在するという(Soyka 1906, 38)。ひとつは、刑法に表現されている一般的な見解であり、悪徳(Laster)の概念に代表される。これは刑罰を要求する。もうひとつは、性倒錯を悪徳ではなく「病気」とみなす医学的見解であり、これは憐憫(Mitleid)を呼び覚まして治療しようとする。ゾイカが前者を糾弾と同時に、後者の医学的見解に対しても厳しい批判を展開するのだが、その理由のひとつは当時(一九世紀末から二〇世紀初頭、さらにそれ以降も)の医学界において支配的・常識的だった「病気に」対する捉え方である。つまり病気を価値の低い状態(Minderwertigkeit)、「正常な状態」(normaler Zustand)あるいは「正常な性目的」(normales Sexualziel)からの逸脱、「別の状態」(anderer Zustand)と捉える見方である²³。

ゾイカは「刑法と医学」に見られる「犯罪者と病人」についてのこれらの偏見に対してさらに激しい論駁を加える。「神聖なるもの」と「力」(Macht)の論理に立ち戻りつつ、「法」のもとに「神聖化」された裁判と「医学」のもとに「神聖化」される精神医療(Psychiatrie)を対比してみせる。「神聖なる裁判」はもはや克服された古い見解(Anschauung)である。だが、犯罪者を病人と見なす医学理論の中に、その「聖なる」代理人が復活した(Soyka 1906, 46)。この理論はヒューマニズムの装いをもっている。悪徳者に対する復讐に代わって、病人に対する保護が登場したからだ。こうした論争的なゾイカの論述は、当時の時代を席卷した道德論争を背景としたものだが²⁴、「神聖なる」法という力(Macht)に基づいた裁判官に代わって、

Werke war. 最後の部分は伝統的な概念に対する批判である。

²¹ フロイト『エロス論集』の『性理論三篇』(中山訳)に紹介がある(41頁)。

²² August Forel(1848-1931)。スイスの精神医療家であり、また優生学(Eugenik)の先駆者・唱導者でもあった。

²³ 「正常な性目的(normales Sexualziel)」とはSinnlichkeitのひとつの形態にすぎないとゾイカは論じている。ここでもゾイカはフロイトに依拠して次のように述べる。In seiner letzten Schrift gelangt Professor Freud zur Annahme einer indifferenten Periode beim heranwachsenden Menschen, in welcher ein unbestimmter Trieb auf das andere Geschlecht gelenkt wird. Also ein Geschlechtstrieb, der erst nach seinem Auftreten auf das Geschlecht gelenkt wird, d.h. zum Geschlechtstrieb gemacht wird!“ (Soyka 1906, 43f.)

²⁴ たとえばMoltke-Eulenburg-Affäre。ただしこのスキャンダルがMaximilian

オットー・ゾイカの初期幻想小説における Macht の諸相

最先端の科学を身に付け、人間の心理を読み取る技術を習得した医師＝精神医療家 (Psychiater) が人間の運命を左右しうる新たな力 (Macht) を獲得したことを描きだしたものだといえるだろう。そのことは、直接には最終審判者としての精神医療家について言われていることだが、より一般的に解釈することができるだろう。

Es is eine große Gewalt über Menschen vorhanden, an kein ausreichendes Gesetz gebunden (wie letzteres bei dem Richter der Fall), die das Individuum, dem sie verliehen [ist], nicht mehr vernunftmäßig zu brauchen weiß. (Soyka 1906, 49)

それを与えられた個人がもはや理性的に使用することができない、しかも法の規制さえからも解き放たれた「力」が存在するということだ。それはカエサルたちの狂気 (Cäsarenwahnsinn) や熱帯熱病のように暴力的な力 (Gewalt) である。だが、人間に対する大きな力、個人が統御しうる力、これは Macht のテーマとして後のゾイカの小説に繰り返し現れることになるだろう。

ゾイカは *Jenseits der Sittlichkeits=Grenze* の最後の章 *Versuch einer Zwecktheorie des Natürlich-Stittlichen* において、「神聖なる法」のもとでのヒステリー的強迫症からも、「神聖なる医学」のもとでの精神医療家の追及からも自由な「自然＝道徳」的な人間像を描きだしている。それは存在そのものに内在する *Werbung um Liebe* (愛の獲得) に根ざし、存在の最高形態である人間においては Macht として体現されるものである (Soyka 1906, 72)。

Macht ist Einfluß auf menschliches Schicksal, das eigene eingeschlossen. Reichtum ist nur die gangbare Form der Macht. Macht zum täglichen Gebrauch. Diesen Gütern ist gemeinsam die Fähigkeit, das Interesse vieler auf ihren Besitzer zu lenken, Aufmerksamkeit zu erregen. [...]

Ruhm und Macht haben nur Wert durch die anderen und in Beziehung auf sie. Macht ist die Möglichkeit, sich Achtung, Bewunderung, Liebe zu erwerben oder auch Schreck, Furcht und Haß zu erregen. Durch alle diese Gefühle, so entgegengesetzt sie scheinbar dem schlechweg Liebe genannten sind, wird das Bild ihres Erregers, seine Vorstellung im Bewußtsein anderer lebendig erhalten. [...]

Sowohl das weithin sichtbare Geschehen der Weltgeschichte als die unscheinbare tägliche Arbeit des Einzelnen sind ein Kampf um ein Mehr

Hardenによって暴露されたのは1907年である (Ruthner 2004, 223)。

oder Weniger von Macht. [...] Ein Trieb, ein Wille ist im Dasein, Wille zur Macht, den Macht ist Liebeswerben. (Soyka 1906, 73ff.)

法の神聖さも医学(心理療法)の神聖さも必要としない「新しい人間」、自己のMachtによって(自己も含めて)人々の運命に影響を及ぼし、人々の感情を揺さぶり沸き立たせ、人々の意識(Bewußtsein)の内部に心理的に食い込む(Liebeswerben)人間。富も榮譽も人々の心(Gefühl/Liebe)を獲得する(werben)ための手段ではないMachtmenchである²⁵。

3. „Neue Menschen” – Herr im Spiel

Berthold Viertelは1910年に刊行されたゾイカの第二作目の小説²⁶Herr im Spielの書評に„Neue Menschen“というタイトルを付けている。その冒頭にViertelは「この小説はひとつの思考(Gedanke)の悲劇的な帰結であり、そしてその思考は悲劇的な人格の帰結でもある」と書いている(Viertel 1910, 40)。ふつうの作家ならば、小説の中に何らかの思考を表す場合にも、叙情的あるいは情緒的な表現でもってこと足れりとするだろう。だが、ゾイカは従来の作家とはまったく異なったタイプである、とViertelは続ける。

Hier aber beginnt ein Gedanke zu sprechen. [...] Weil er vornehm ist, begnügt er sich mit wenigen Worten. Ein neuer Typus entwickelt seine spröde und lapidare, streng intellektuelle Form. (Viertel 1910, 41)

こので言われているGedankeとは、何らかの哲学的な思想ということではない。それは主人公コンラート・ヴェーレンの徹底した思考・思惟であり、ゲームを支配し、人々の心理を統御しようとする思考あるいは意志、つまりMachtへの意志である。この意志がゾイカの小説にそれまでには見られなかった新しい形態と即物的(sachlich)でクール(kühl)で斬新な(kühn)な語り口を生み出している²⁷。主人公ヴェーレンは社会のあらゆる慣習に背を向け、冷徹で完璧な賭博師(Spieler)と

²⁵ Ruthner (1995, 205)の述べるように、Machtのテーマは世紀転換期から両大戦までの時代を強烈に刻印した陰鬱な強迫観念(Obsessionen)のひとつであった。

²⁶ 処女作のDie Söhne der MachtはJenseits der Sittlichkeits=Grenzeが刊行された1906年にすでに書き下ろされていたが、出版社が見つからず、1911年になってミュンヘンのHyperion社から出版された(Garstenauer 2003, 104)。1911年の出版社はAlbert Langenが正しいと思われる(Bloch 1999, 9)。

²⁷ Viertelは同じ書評の冒頭に„Die kühne und kühle, schroff sachliche und phantastisch wesentliche Erzählung Soykas“と書いている(Viertel 1910, 40)。

なって社会を敵に廻して生きることを決意する。

Einmal, vor Jahren, hatte er bewußt und kühl überlegend, den Beruf des Spielers gewählt. Keine Leidenschaft war es, die ihn angestachelte, kein Zufall, der ihn hineingetrieben. (Soyka 1910, 48)

Während er ein Jahr lang durch Stundengeben die Existenz fristete, begann er zielbewußt und konsequent sich zum Spieler auszubilden. Er wußte ja, was es hieß, Spieler sein. Das bedeutete unter Feinden leben, das verlangte, jeder Art Niedertracht die Spitze bieten zu können, dazu mußte man Rücksichtslosigkeit und eiserne Nerven besitzen. (ebd., 50)

ヴェーレンは一般社会とは隔絶した暗黒の世界、つねに敵に囲まれた暴力の世界で生き抜くために、武器の扱い、肉体の鍛錬を含めてあらゆる訓練を積む。一年間にわたってヴェーレンは賭け事の世界に潜入し、賭博をする人々の行動、仕草、表情を観察し、賭け事の成り行き、展開、勝負の動き方を分析する。とりわけ、賭博師たちの神経、心理、精神の領域に踏み込んで勝負の理論を構築し、それを徹底的に応用する。

Er ging systematisch vor bei seiner Ausbildung zum Spieler. Er studierte wissenschaftliche Werke über das Nervenleben, er beschäftigte sich mit den Krankheitserscheinungen, von denen dieses bedroht wird. Und bei diesem Studium stieg zum ersten Male der Gedanke in ihm auf, aus dem sich seine Theorie über Gewinnen und Verlieren entwickeln sollte, jene Theorie, die seiner Spielerpersönlichkeit das eigentliche Gepräge gab. (ebd., 51f.)

自らの賭博理論の徹底的な応用 (Macht des Intellektes) と、人間の心を読み取り心理的に操作する力 (Macht der Suggestion) によってヴェーレンは次々と大金を手にし、大富豪としての地位を築く (Macht des Geldes) ²⁸。そして、その莫大な資金によって周囲に集まる人々の運命さえも決定することに喜びを見出す。だが、やがて彼の理論が破綻する時が巡ってくる。巨額の借金を抱えたヴェーレンは賭博師を引退する決意をするが、その時、彼の唯一の同盟者だった技師ローリングが銀行の金庫破りに荷担するように促す。ローリングは銀行の頑丈な金庫の鋼鉄を切断する工具を発明していたのだ。ヴェーレンは固辞するが、(ある女性とその弟との関

²⁸ Viertelはその書評の中で次のように書いている。 „Dieser Spieler wählt hiermit die eine große Möglichkeit des Menschen: die Macht. Unumschränkte Macht, die sich vor allem der eigenen empirischen Person vesichern muß.“ (Viertel 1910, 42)

係のために) 金庫破りの計画に加わる決断をする。計画が成功し、借金を返済する手続きを済ませたあと、警察に電話をして犯行を告白する。そして、警部が電話を聞いている間に、銃で頭を撃ち抜いて自殺を遂げるのである。

ゾイカは、主人公ヴェーレンを市民的社会の伝統的な慣習に背を向け、ただひたすら自らの意志に忠実に生きる人間として描き出した。それは市民社会にとって(そして自己にとっても) 破壊的な人間である。ViertelがHerr im Spielの書評のタイトルを „Neue Menschen“とした理由はここにある²⁹。Garstenauerは「(彼の他の小説も含めて) 彼の同時代の人々から熱望され、戦慄をもって待望された»新しい人間«の心理を実験している」と指摘している(Garstenauer 2003, 105)。Urbachによれば、「ゾイカの描き出した»新しい人間«(der neue Mensch)は化学的に純粋であり、物理的に完璧である。この人間は苦心のすえに徹底して蒸留され、構築されている。ホムンクルス、怪物である。この〈新しい〉人間は古い世界にもちこまれる。彼は破壊し、押し潰す——他者も、そして自らも」(Urbach 1985, 254)³⁰。ホムンクルスとしての「新しい人間」である³¹。Viertelの言葉によれば「ゾイカの新しい人間は観察された現実をはるかに越えるものである、彼は人間となった理念であり、精神の行為である」(Viertel 1910, 47)。ゾイカの小説の主人公のもつ特異な幻想性はここにある。ここには(彼の他の小説にも見られるように)「極めて人工的に構築され、極端に先鋭化された個人的心理」(Rottensteiner 1997, 3)が呈示されてはいるが、同時にまた「ゾイカは可能なこと(Mögliches)をあたかも現実(wirklich)であるかのように、現実になるかのように描写することに成功している」(Urbach 1984, 253; 1999, 7)³²。Viertel(1910, 40)が書評の冒頭でphantastisch wesentlichという言葉で表しているのもこの幻想性を指しているのであろう。「ゾイカの方法は十分に自立した心理的幻想文学(psychologische Phantastik)であり、判断を下す前に、まず究明しなければならないであろう」(ebd., 47)。

だが、ゾイカの「新しい人間」はつねにMachtを希求する人間でもある。Herr im Spielにおいては、ヴェーレンは賭博の理論を構築する知性の力(Macht des Intellektes)の持ち主として描かれる。賭博という偶然の世界を統御する理論を組

²⁹ Viertel (ebd.): „... aber es gibt ein Menschentum, das neuer ist, als alles Neueste, und eine Atmosphäre, von der die Zeit zu lernen hätte.“

³⁰ Urbach (1999, 7f.)にも同じ文章がある。

³¹ Garstenauer(2004, 105)は „technoid anmutende Ungeheuern“と表現している。

³² Urbach(1984, 253; 1999, 7)はこれを別の言葉で置き換えている。„... sie [Soykas Romane und Komödien] sind nicht wahrhaftig, aber sie wirken wahrscheinlich.“

オットー・ゾイカの初期幻想小説における Macht の諸相

み立てる知力である。この知的な理論化は、心理学の研究によって獲得した暗示の力 (Macht der Suggestion) と重ね合わせられている。

Wenn es bis jetzt niemals gelang den Spielererfolg auch nur annähernd rechnermäßig vorauszubestimmen, so liegt die Ursache darin daß man eine wichtige Größe, die in Frage kommt, nicht kannte und vernachlässigte: Suggestion. Wo immer zwischen zwei oder mehreren Personen jener Kontakt hergestellt wird, den wir Spielen nennen, stellt sich auch eine suggestive Wirkung der Personen aufeinander und der Spielerereignisse auf Personen ein. (Soyka 1910, 52)

この「暗示の力」はさらに「人間的な力」(persönliche Macht) へと転換される。ヴェーレンにとって、この力は人間の意志とエネルギーの作用が賭博 (Spiel) の勝負を決するという信念 (Überzeugung) から発する。それに対して、ともに社会の敵対者として、ヴェーレンの同盟者である技師ローリングは、人間的なものにはいっさい関心を持たず、ただ「富の力」(Macht des Reichtums) のみを信じている。

„Ich interessiere mich für keine andere Sache, als für die Macht. Ich habe alle möglichen Empfindungen gekostet, ohne daß ich zur Ansicht kam, es lohne sich, um ihretwillen zu leben. Nur dieses Erlebnis fehlt mir, Macht zu besitzen. Ich erkenne auch nur eine Art, mächtig zu sein, an, und die heißt Reichtum.“ (Soyka 1910, 58)

ここには二人の「容赦ない力=人間」(rücksichtslose Machtmenschen) が対比されている。コンラート・ヴェーレンには容赦ない「意志・暗示・知性」の力 (Macht) が、ハインリヒ・ローリングには (いささか批判的に) 「金・富の力」(Macht des Geldes) が体現されている。「新しい人間」ヴェーレンにとっては「金」が問題なのではなく、自ら決断した行動原理に徹底して忠実に生きることに尽きるのだが、旧世界においては必然的に「犯罪者」の烙印を受けることになる。ヴェーレンの死は、自らの原理の最後の帰結 (あるいは最後の演出³³) に殉じた英雄死といえるだろう。

4. Die Söhne der Macht

ゾイカの「新しい人間」は、旧式の市民道徳と法律が支配する「古い世界」(ヨーロッパ) においては、自らの意志で英雄的に自滅する道を選ばざるをえなかった。

³³ Vgl. Rottensteiner (1997, 3)

だが、途方もない富と金の力が支配する「新しい世界」(アメリカ)においては、力をめぐる闘いはどのような様相を呈するのか。すでに 1906 年に書かれながら³⁴、1911 年 (Herr im Spielの一年後である) になって出版されたゾイカの処女作Die Söhne der Machtは、法も道徳も膨大な富によって止揚された世界に侵入を図る(悪の) 挑戦者に対する熾烈な闘いを描き出す。

この小説の「混合ジャンル性 (Mischgenre)」³⁵が、ゾイカの後に続く作品の特徴を最初に刻印したといえるであろう。Ein Zukunfts-Detektivromanというサブタイトルは、作者ゾイカの「混合ジャンル」への意志を端的に表している。SFあるいは幻想小説と探偵小説の混合形態が成功することはまれだと言われるが、それにもかかわらずこの混合分野では数多くの作品が書かれ、そのもっとも初期の作家としてゾイカの名があげられることが多い(Rottensteiner 1993, 1)³⁶。ゾイカのHerr im Spielが「超犯罪者 (Superverbrecher)」³⁷を主人公とする幻想的犯罪小説だとすれば、Die Söhne der Machtは(幻想的) SF犯罪=探偵小説である。実際に探偵が主人公として登場し事件を解決するという意味では探偵小説だが、「犯人探し」が中心ではない。「超探偵」(Superdetektiv) Sartoには犯人が誰かは最初から分かっているので、「超犯罪者」(Superverbrecher) Taveraの犯罪を証明することが課題である。その意味では、1906 年に書かれたゾイカのDie Söhne der Machtは倒叙形式による探偵小説(「ハウダニット」)の先駆者といえるだろう。

小説の舞台が資本主義の新興国アメリカ(ニューヨーク)が選ばれていることは、この時代(二〇世紀初頭)のヨーロッパにとって重要な意味をもっている。1900 年頃には、「アメリカ式大量生産という妖怪がヨーロッパを徘徊し始めた」(Schivelbusch 2003, 299)。もっとも、世紀転換期頃に「新たな世界的経済強国アメリカ」に脅威を抱いたのは、「経済と技術の専門家に限られていた」(ebd., 302)

³⁴ Soyka: „Ich bekam ihn oftmals zurück. Es war damals in Deutschland nicht Sitte, Bücher mit so viel Inhalt zu drucken, man wollte Feinheiten und Stimmungen haben und auch eine größere Portion Wahrscheinlichkeit.“ zitiert in Urbach (1999, 4).

³⁵ Vgl. Ruthner (2004, 228): Mischgenre aus Phantastikun Abenteuer- bzw. Kriminalroman. Garstenauer (203, 104)はDie Söhne der Macht をScience-fiction-Detektivromanと呼んでいる。

³⁶ SFと幻想小説の区別もジャンルのな区分線を引くことはできるが、数多くの混合形態が見られる (Innerhofer 1996, 11)。

³⁷ Rottensteiner (1993, 5)はゾイカのDer entfesselte Mensch (1919)以降の作品をあげているが、Herr im SpielのヴェーレンもまたSuperverbrecherであろう。

オットー・ゾイカの初期幻想小説における Macht の諸相

ようだが、ゾイカがそうした専門的な知識人の一人だったことは間違いないだろう。ゾイカは 1899 年からウィーン工業大学 (Technische Uni Wien) で機械工学 (Maschinenbau) を学んでいたからである (Garstenauer 2001, Anhang 2)³⁸。Die Söhne der Machtの第一章のタイトル Die neue Machtとはニューヨークの金融大資本家たちのことを指している。莫大な資産を自由にできる大富豪、エクダール・フロナー(Ekdal Fronner)の二人の息子ハインツとフレッドがアメリカ南海岸のヨット上で熱病のために死亡したという新聞記事が一斉に流れた。だが、この報道はフロマーが報道メディアに手を廻して流させたものだった。事実は、ヨット上でハインツの銃殺死体が発見され、フレッドは行方不明のままだった。巨大資本家たちは報道記事さえも意のままに操ることができた。それは富の力 (Macht des Reichtums) だった。

Unsere Zeit, die das Geld als sublimstes und wirkungsvollstes Machtmittel herausbildete, sah eine ungeheure Anhäufung des Machtmittels in den Händen dieser wenigen mit an, ohne die notwendigen Folgen derselben zu begreifen. [...] So wie man eine kritische Temperatur kennt, bei der die Stoffe der Chemie ihr Wesen ändert, so gibt es einen kritischen Punkt bei der Anhäufung von Macht: an dem die Rechte und Pflichten nicht mehr dasselbe sind wie früher, an dem die Worte „Möglich und „Unmöglich“ einen andern Sinn erhalten haben. (Soyka 1917, 7f.)³⁹

この少数の富める者たちは、意のままに都市を建設し、そして破壊することができる。そこに住む人間の運命を握っているのはこの富める者 (der Mächtige) である。国家の定めた法や保護は富者のもとでは通用しない。自らの法と保護は自らの富によって手に入れるのである。警察や裁判官が、富者の世界で起きる事件に介入でき

³⁸ ゾイカの技術に対する偏愛は、Herr im Spielに登場する技師ハインツ・ローリングに表れている。Garstenauer (2003, 104)はゾイカが„Das Gespür für die Problematik neuer Technologien“をもっていたと記している。

³⁹ Die Söhne der Machtは 1911 年にミュンヘンのAlbert Langen社によって初版が出版されたあと、1917 年にはFischer社のBibliothekから再版され、その後も 1928 年、1930 年、1936 年と版を重ねた。引用は 1917 年のFischer版による。このFischer版について、Urbach (1999, 4)は次のように記している。„1917, als die USA in den Krieg eintraten, kam der Roman in der populären und verbreiteten Reihe Fischer »Bibliothek zeitgenössischer Romane« heraus, und es muß sich kurios ausgenommen haben, mitten im Krieg die Verherrlichung amerikani- schen Supermachtstrebens im Deutschen Reich verbreitet zu sehen.“

福本 義憲

る機会はほとんどない。無制限の富の力 (Macht des Geldes) をもつ者たちのもとには、各自が独自の治安力 (Ordnungsmacht) を保持している。高額で雇用され絶対的な服従を誓うその警護隊 (Garde) は、探偵社あるいはヨーロッパの軍隊で特別な訓練をうけた専門家集団である。

Die waren die Werkzeuge ihres Gebieters für außergesetzliche Wünsche und schützten ihn vor außergesetzlichen Angriffen. Ihre Notwendigkeit war schon dadurch gegeben, daß Angriffe aus gewinnsüchtigen Motiven auf Personen dieses Kreises für die sozial tiefstehenden Schichten eine besondere große Lockung bedeuteten. (ebd., 18)

この「国家の中の国家」に仕えるのが、探偵たちである。Ekdal Fronner は自分と息子たちに仕掛けられた攻撃に対抗する職務を二人の探偵に委託する。一人はロシア革命の女性亡命者 Marfa Awdtjewna であり、膨大な数の工作員・スパイを動員して、裏社会の陰謀の動きを調査する組織家である。もう一人の探偵は、Marfa のような組織力ではなく、途方もない知的能力と身体能力と資産を有するアメリカ人 Erich Sarto である。

Er liebte den Sport, er trieb ihn leidenschaftlich und hatte Preise in den internationalen Wettkämpfen gewonnen. Er beschäftigte sich mit Wissenschaft, besaß ein Laboratorium und eine Werkstatt [...] Sein Verstand mochte ungewöhnlich, seine körperliche Fähigkeiten aufs Äußerste ausgebildet sein, das teilte er mit andern; was ihn aber von allen Menschen unterschied, das war eine besondere Macht der Persönlichkeit, die nicht im Auge, nicht in der Haltung, nicht im Geiste des Mannes, aber vielleicht in dem allen zusammen lag. (ebd., 22)

知性の力 (Macht des Intellektes) と富の力 (Macht des Reichtums) を Sarto は有しているだけではない。他をはるかに凌駕するのは彼の特別な人格の力 (Macht der Persönlichkeit) である。この力は、法の神聖さも医学 (心理療法) の神聖さも必要としない。Jenseits der Sittlichkeits=Grenze (1906, 73ff.) に描き出されたように、人々の運命に影響を及ぼし、人々の感情を揺さぶり沸き立たせ、人々の意識 (Bewußtsein) の内部に心理的に食い込む力である⁴⁰。したがって、法意識や正義

⁴⁰ この力からは女探偵 Marfa も逃れることができない „Sie entzog sich jenen Einflüssen seiner Persönlichkeit nicht mehr, die ihm die Herrschaft über so viele Menschen verschafften.“ (Soyka 1917, 41)

オットー・ゾイカの初期幻想小説における Macht の諸相

感がSartoの行動を促すのではない。探偵活動はSartoにとってあくまでもSport、あるいは個人的関心であるにすぎない⁴¹。

Es war ihm ein Sport, wie jeder andere. Nie konnte er sich über ein Verbrechen entrüsten, nie hatte ihn eine Schurkerei empört. [...]

Nur seine Lust am Sport oder das Interesse an seiner Person vermochten diesen Mann dazu, seine Fähigkeiten in den Dienst einer menschlichen Angelegenheit zu stellen. (Soyka 1917, 23)

同時にまたSartoは最新の科学技術に通暁し、その技術を徹底的に活用する探偵でもある。彼の事務所は方向を自由に操作できる無数の鏡、写真機、録音機（そして銃器）が埋め込まれている。事務機の手許の小さな操作盤（一種のキーボードである）によって、相手に気づかれずに観察し、記録し、場合によっては射殺することさえできるのである⁴²。Sartoの「人格的な力」においては知性と科学技術が純粹に無目的に一体化され、「富の力」に支えられて社会的道徳規範を超越したSpieler（遊戯者）の性格が強まれば強まるほど⁴³、皮肉なことに自身が知性と技術の論理に支配される操り人形と化していくのである（Vgl. Innerhofer 1996, 426）。

富める者たちの「新しい力」に攻撃を仕掛けるのは、旧世界から渡ってきたSartoの敵対者Ernst Herbert Taveraである。Taveraは新世界においてある資産家の女性に取り入ってその莫大な遺産を我が物とした。その資産を元手として、人間に対する支配欲に駆られて、自らの支配力を無限に拡大するために、闇社会にその組織を網の目のように広げている「超犯罪者（Superverbrecher）」⁴⁴である。Sartoと同様に社会的道徳規範を超越した場にいるTaveraもまた「人格的な力」の所有者とされるが、Sartoとは違って、その力は「精神医療（Psychiatrie）」の研究によって獲得されたものである。

⁴¹ Rottensteiner (1993, 1) によれば, „Er [Sarto] ist [...] eine Spielernatur, welche die Verbrechensbekämpfung als Gesellschaftsspiel auffaßt, [...]“ となる。Urbach (1985, 258)は ein präfigurierter James Bondとさえ言う。

⁴² Vgl. Innerhofer (1996, 426): „Soyka führt in seinem Zukunfts-Detektivroman einen neuen Heldentypus ein, der der modernen Tendenz zur Versachlichung und Funktionalisierung entspricht.“

⁴³ その「人格的な力」にもかかわらず、おそらくその無規範性のゆえに「非人格性」が感じられるのは近代の探偵像に共通する点であろう。クラカウアーが合理(ラチオ)の自律性の体現者として呈示する探偵像につながる場所である(Kracauer 1979, 52f.)。

⁴⁴ Vgl. Rottensteiner (1993, 1)

Tavera besaß die Macht einer Persönlichkeit. Tavera hat jahrelang Studien im Gebiete der Psychiatrie getrieben, er kennt das Gehirn, er weiß es zu erobern, er kennt die Stellen, die ungeschützt sind. Moderner Verbrecher, der er ist, hat er nicht nötig, Dietriche für Geldschränke anzuwenden, er hat den Dietrich zu Gehirn zu seiner Verfügung. (Soyka 1917, 56)

Tavera は人間を屈服させる力に陶酔する「病人」(Er ist krank an dieser Gier, Menschen zu unterjochen) であり(Soyka 1917, 58)、力(権力)を自己目的と見なしている(ebd., 61)。

Wenn jene Cäsaren, nach denen ein Wahnsinn genannt ist, in der Gegenwart gelebt hätten, sie hätten ein Leben nach seiner Art geführt. Er genoß, wie einst sie, die Gewalt über Menschen. ... Gewalt über Menschen hieß: Gewalt haben über Schicksale und Seelen. (ebd., 62)

ここには、ゾイカが *Jenseits der Sittlichkeits=Grenze* において神聖な裁判官に代わって登場した神聖な「精神医療家」の傲慢、横暴を記したときとほとんど同じ言葉が用いられている。「カエサルたちの狂気 (Cäsarenwahnsinn)」であり、「人間に対する力 (Gewalt)」である。その一節を再録しておこう。

Es is eine große Gewalt über Menschen vorhanden, an kein ausreichendes Gesetzes gebunden (wie letzteres bei dem Richter der Fall), die das Individuum, dem sie verliehen [ist], nicht mehr vernunftmäßig zu brauchen weiß. (Soyka 1906, 49)

「カエサルたち」とは、人間に対する支配力 (Gewalt) に陶酔する独裁者である。人間に対する Macht が Gewalt に転化する境界がここにある。Tavera はその意味において *Machtmensch* が *Gewaltmensch* に変じた独裁者像を表している。

だが、Taveraの人間に対する支配力は精神医療 (Psychiatrie) に止まらない。彼は化学者Matteo Simiaを配下において、巨大な実験室を設置し、人間の神経を麻痺させ彼の意志のままに従わせる化学物質を開発し、大量に製造する (Soyka 1917, 58)。それは「空気」(Luft) と呼ばれ、地下のガス管を通じて都市の特定の建物に送られる仕組みになっている。その「空気」は様々に調合されて、それを吸った人間の行動を特定の方向に統御できるのだ⁴⁵。この化学物質「空気」、そして精神医学によって修得した「暗示」(Suggestion) と「催眠」(Hypnose) がTaveraの人間に

⁴⁵ このテーマは第一次大戦後の1921年に発表されたTraumpeitscheに引き継がれる。そこでは、TaveraはPalmとなって現れる。

オットー・ゾイカの初期幻想小説における Macht の諸相

対するMacht/Gewaltを獲得する手段である。

最新の科学技術の駆使、相互のスパイ組織の大量動員、そして化学物質の作用と暗示・催眠による人間心理の操作 (Manipulation) が、Sarto と Tavera の闘いを特徴づけている。どちらが先手を取るか、どちらが相手の裏をかくかが、その先の闘いを規定する。相手より多くの情報を手に入れた側が先手を制する情報戦でもある。競って莫大な資金が投じられて、無数の書類・写真・録音が秘密裡に調達され、そして最高の技術によって模写され、偽造されるのである。どれが本物でどれが偽物かはもはや見分けがつかない。ここにおいて、犯罪者と探偵の闘いは、「悪」に対する闘いであることを止め、技術戦と心理戦の論理のみに従って展開される闘いとなる。そこでは、Sarto の Macht と Tavera の Macht/Gewalt の区別はもはや消失している (Vgl. Rottensteiner 1993, 2)。最後の場面で Tavera が Sarto を迎えたとき、Tavera はこういつてのける。

„Ich habe mir immer geschmeichelt, es sei eine Art Wettstreit zwischen uns, ein Kampf zweier ebenbürtiger Persönlichkeiten, die einander achten.

Sollten Sie wirklich auch andere Motive haben als eben nur diesen

Kampf?“ (Soyka 1917, 183f.)

だが、ゾイカが皮肉と喜悦を込めて描いたように、社会的規範を超越したMachtspielの盤上を戦場として、技術操作(Technologie)と心理操作(Seelentechnik)の論理を徹底して闘ったSartoとTaveraはPersönlichkeitですらない。幻想上の盤面で同一のMachtを闘わせた精巧な機械人形にほかならないのだ⁴⁶。

⁴⁶ この場面の後にTaveraがSartoの部下によって射殺されるのは、Rottensteinerによれば„ein reiner Willkürakt in einem außerhalb der üblichen gesellschaftlichen Bezüge angesiedelten Spiel“でしかない(Rottensteiner ebd.)。

福本 義憲

文献

- Bloch, Robert (1999), N.: Otto Soyka. Bibliographie. In: Körber, Joachim [Hg.]:
Bibliographisches Lexikon der utopisch-phantastischen Literatur. 56.
Erg. Lfg. Januar 1999. 1-16. Corian Verlag.
- Breuer, Josef/Freud, Sigmund (2007): Studien über Hysterie. Fischer-Verlag. 邦
訳: 金関訳『ヒステリー研究 (上・下)』、ちくま学芸文庫. 2004年.
- Freud, Sigmund (2000): Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. In: A.
Mitscherlich/A. Richards/J. Strachey [Hrsg.]: Studienausgabe Band V.
邦訳: 中山『エロス論集』、ちくま学芸文庫. 1999年.
- Garstenauer, Werner (2001): „Der andere, das war ich“. Magnetiseur- und
innovative Heldenfiguren in Otto Soykas Romanen „Das Glück der
Edith Hilge“ und „Der Mann in der Kulisse“ nebst Rezeptionsübersicht
und tabellarischer Biographie des Autors. Diplomarbeit. Wien.
- Garstenauer, Werner (2003): Über Otto Soyka (1881-1955). In: Literatur und
Kritik. 371-372 (März 2003), 103-111.
- Hahnl, Hans Heinz (1984): Vergessene Literaten. Fünzig österreichische
Lebensschicksale. Österreichischer Bundesverlag. 139-141.
- Innerhofer, Roland (1996): Deutsche Science Fiction 1870-1914. Rekonstruktion
und Analyse der Anfänge einer Gattung. Böhlau.
- Kracauer, Siegfried (1979): Der Detektiv-Roman. Ein philosophischer Traktat.
suhrkamp taschenbuch wissenschaft 297. 邦訳: 福本義憲『探偵小説の
哲学』、法政大学出版局、2005年.
- Rottensteiner, Franz (1993a): Otto Soyka. Die Söhne der Macht. Ein
Zukunfts-Detektivroman. In: Lexikon der Kriminalliteratur. Teil 2:
Werke. Orian-Verlag. 1. Erg.-Lfg. September 1993. 1-3.
- Rottensteiner, Franz (1993b): Verbrechen und Detektion in der utopisch-
phantastischen Literatur. Ein Überblick. In: Lexikon der Kriminal-
literatur. Teil 3: Themen/Aspekte. Orian-Verlag. 1. Erg.-Lfg.
September 1993. 1-15.
- Rottensteiner, Franz (1995): Otto Soyka. Die Traumpeitsche. In: Lexikon der
Kriminalliteratur. Teil 2: Werke. Orian-Verlag. 8. Erg.-Lfg. Februar

オットー・ゾイカの初期幻想小説における Macht の諸相

1995. 1-5.

- Rottensteiner, Franz (1997): Otto Soyka. Herr im Spiel. In: Lexikon der Kriminalliteratur. Teil 2: Werke. Orian-Verlag. 18. Erg.-Lfg. Juni 1997. 1-3.
- Ruthner, Clemens (1990): „JE VEUX REVENIR“ Studien zu der Revenantfigur und ihrem Umfeld von Ewers, Soyka, Spunda, Strobl. Diplomarbeit. Wien.
- Ruthner, Clemens (1995): Droge Macht. Zu Otto Soykas Traumarbeit. In: Otto Soyka. Traumpeitsche. suhrkamp taschenbuch. Phantastische Bibliothek. 195-212.
- Ruthner, Clemens (2004): Am Rande. Kanon, Kulturökonomie und die Intertextualität des Marginalen am Beispiel der (österreichischen) Phantastik im 20. Jahrhundert. A. Francke.
- Schivelbusch, Wolfgang (2003): Die Kultur der Niederlage. Fischer Taschenbuch Verlag. 邦訳: 福本・高本・白木『敗北の文化』、法政大学出版局、2007年
- Siebauer, Ulrike (2000): Leo Perutz – „Ich kenne alle. Alles, nur nicht mich“ Eine Bibliographie. Bleicher Verlag.
- Soyka, Otto (1906): Jenseits der Sittlichkeits=Grenze. Ein Beitrag zur Kritik der Moral. Akademischer Verlag. Wien u. Leipzig.
- Soyka, Otto (1910/1922): Herr im Spiel. August Scherl. [Die 1. Ausgabe bei Hyperion, 1910]
- Soyka, Otto (1911/1917): Die Söhne der Macht. Fischer Verlag. [Die 1. Ausgabe bei Albert Langen, 1911]
- Soyka, Otto (1953): Begegnungen mit Karl Kraus. In: Die Schau. Halbmonatshft für Kultur und Politik. 19/20. 9f., 21.
- Soyka, Otto (1995): Die Traumpeitsche. suhrkamp taschenbuch 2486.
- Urbach, Reinhard (1985): Ist die Macht böse? Macht-Utopien in der österreichischen Trivialliteratur des 20. Jahrhunderts. In: Leser, Norbert Hg.: Macht und Gewalt in der Politik und Literatur des 20. Jahrhunderts. 249:261. Böhlau.
- Viertel, Berthold (1910): Neue Menschen. In: Die Fackel, NR.311-314, 1910-11. 40-47.